

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ の特質

小 西 康 雄

20世紀に入ってからアメリカ詩壇の複雑な流れの中で、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズは、特異な作風によって、アメリカ現代詩に新しい境地を拓き、「実験派の巨匠」として、後のアメリカ詩に大きな影響を与えた。数も極めて多く、様式也多岐にわたるウィリアムズの作品の中から、いくつかの詩を選んで、彼の特質の一つ、すなわち、詩の主題としての事物の捉え方と、その意味するところについて、具体的に考えてみたい。⁽¹⁾

I

ウィリアムズは、日常の身近に存在するありとあらゆる事物や現象を、詩にした。チューインガム、キャンディー、タイプライター、電話器、眼鏡、紙の箱、一枚の紙きれ、ビンのかけら、など、およそ詩的でない物が、彼の詩の主題となった。しかも、このようなおよそ詩的でない事物を、ウィリアムズは、情緒や感情を排した即物的な表現によって、記述したのである。それまでの詩の中で、観念や思惟や論理で縛られていた事物や無視されていた事物は、夾雑物を剥ぎ取られた生の形で、それ自体の存在を主張することになる。これを最もよく示しているのが、代表的な作品、“The Red Wheelbarrow”⁽²⁾である。

so much depends

upon

a red wheel

barrow

glazed with rain

water

beside the white

chickens.

ここにあるのは、“so much (たくさんのも)”と“a red wheel/barrow (赤い手押／車)”と“the white/chickens (白い／ニワトリ)”だけである。理念や感情や寓意を見つけようとするのは無理であろう。ウィリアムズは、手押車やニワトリに託して自己の理念や感情を語るのではない。重要なのは、これらの事物の存在そのものなのだ。ウィリアムズは、眼に映った手押車やニワトリに、鋭い集中力と鑑識力を注ぎ、感情や情緒を排して、これらの事物を、虚飾を取り除いたぎりぎりの表現で呈示する。こうして描かれた事物は、切り取られた一つの空間と時間との中で、独自の存在意義を与えられ、観念や意味や論理を超越した存在になるのである。

この詩を読む者は、ウィリアムズの眼を通し、極限にまで達した単純で鮮烈な表現を通して、それまで知らなかった新しい世界を体験する。それは、手押車やニワトリがあまりにも平凡であるために、見過ごしていた世界なのである。アラン・オストロムは、「この短い詩は、ウィリアムズが、現代アメリカのどの詩人にもまして、我々の身の回りの事物に関して、いかに注意を払ったかの好例である⁽³⁾」と述べている。

眼に映る事物を的確に描写した詩の一つに、“Poem”がある。

As the cat

climbed over

the top of

the jamcloset

first the right

forefoot

carefully

then the hind

stepped down

into the pit of

the empty

flowerpot

この詩に於いても、ウィリアムズの眼が捉えたネコの動き以外のものは、何もない。意味の解釈などは拒否されている。ウィリアムズは、ネコの精緻で微妙な身のこなしを、即物的に的確に描くことによって、ネコの存在の本質を捉えているのである。ネコの動きそのものが、ウィリアムズにとっては、詩的真実なのである。ケネス・パークは、「ウィリアムズは、自分が見るものは一瞬のうちに忘れてしまう」と述べ、さらに、ウィリアムズにとっては「眼があり、その眼にとまる事物がある。この両者の間に存在する関係が詩なのだ⁽⁴⁾」と評しているが、この言葉は、ウィリアムズの特質を明確に示すものである。

Ⅱ

ウィリアムズは、このように、身近な平凡な事物を即物的に呈示し、観念や意味を排除して、その事物を、それ自体で完結し独立している存在物として、

表現する。対象とする事物の存在そのものに、意義を認め、詩的真実を把握するのである。しかし、だからといって、ウィリアムズの詩に思想がないというわけではない。たしかに、事物を即物的に描くウィリアムズの詩に於いては、思想が論述されたり説明されたりすることはない。思想は、そのように表わされるのではなくて、呈示される事物の中に凝縮され、暗示されるのである。ウィリアムズ自身も、「事物の中、そこ以外には思想は存在しない⁽⁵⁾」と語っている。“Between walls”は、この一つの例である。

the back wings

of the

hospital where

nothing

will grow lie

cinders

in which shine

the broken

pieces of a green

bottle

何の変てつもない、というよりは、注目にも値しないと思える風景の描写である。ウィリアムズの確かな眼は、「ズームレンズが捕えるように⁽⁶⁾」、病院の裏手から、そこの何も生えていない所にある石炭の燃え殻へと移動して行って、その燃え殻の中で光っている緑色のビンのかけらを見据える。些細で無価値な事物の存在そのものが、ここでは、詩的世界を作っているわけである。しかし、

この詩は、この即物的に描かれた風景の中に存在する何かを、論述という形をとらずに、描写された事物によって、暗示している、と考えることが出来る。これを解く鍵ともいうべきものは、このビンのかけらが“green (緑色)”であって、これが、“...where/nothing//will grow... (何も/生えない//ところ)”に有る石炭の燃え殻の中で輝やいている、という表現である。本来なら緑の草でも生えている筈の場所に、草と同じ色をしたビンのかけらが存在しているのだ。ウィリアムズは、ここでも、眼の前に有る事物とそれの存在の仕方を、夾雑物を取り去った生の姿で呈示するだけである。しかし、読者は、ウィリアムズの的確で鋭い眼で捉えられたこの事物の有り方を通して、「作られた物の美くしさが自然物に取って代っている⁽⁷⁾」様や、さらには、自然の喪失だとか、不毛の世界とかを、把握するのである。

“Between Walls” がさらに極限にまで達したと言えるのが、“Lines” である。この詩は、わずか二行から成っている。

Leaves are grey green,
the glass broken, bright green.

これだけ素気なく、単純で、即物的な詩は、ウィリアムズの詩の中でも、類が無い。緑色をした二つの物が有るだけである。しかし、ここでも、ウィリアムズの眼は、事物に対して鋭く迫っている。葉の緑色は“grey (灰色がかった、陰気な、寂しい)”であるのに、割れたガラスの緑色は[“bright (鮮やかな、明るい、快活な)”]だと、見るわけである。些細な事物の、ただこれだけの即物的呈示によって、“Between Walls” の場合と同様な意味が、ぎりぎりの形をとって、暗示されていると言えよう。

“Classic Scene” は、発電所の風景である。
A power-house
in the shape of

a red brick chair
90 feet high
on the seat of which
sit the figures
of two metal
stacks—aluminum—
commanding an area
of squalid shacks
side by side—
from one of which
buff smoke
streams while under
a grey sky
the other remains
passive today—

巨大な発電所の建物が、的確に描写される。そして、その二本の煙突の存在の仕方が、それに続く。この詩に於いても、ウィリアムズは、眼に映った事物を、没感情的な態度で、具体的に呈示しているだけである。この発電所は、それ自体で完結して存在している一個の事物である。しかし、ここでも、この事物の存在の有り方を看破するウィリアムズの眼は、その事物の本質を冷徹に暴く。発電所の二本の煙突は“commanding an area/of squalid shacks（むさくるしい掘って建て小屋の／集まっているあたりを見おろし）”ており、二本の煙突のうち煙を吐いていない方は“passive today—（今日は、おとなしい）”

のである。この描写は、有るがままの事物の姿だが、ウィリアムズの眼を通して見る煙突の有り方の中に、現代の機械文明や産業主義の巨大で不気味な影を読者は見るのだ。この影は、論述されるのではなくて、ウィリアムズの描く「事物そのももの中」に存在するのである。

事物を描く場合、ウィリアムズは、強烈な集中力と選択力を用いて、その事物の存在の仕方をぎりぎりの姿で捉える。先に採り上げた“The Red wheelbarrow”に於いても、手押車を形容しているのは（第2連を除けば）“red”一語であり、ニワトリを修飾しているのは“white”だけである。“Lines”では、“grey”と“bright”の二語が、そこで描かれる事物の属性のすべてを語っている。他の詩に於いても、事物は極度に切り詰められた修飾しか与えられていない。ウィリアムズは、これをさらに押し進めて、一切の修飾語を捨て去ることを試みた。その例が、“Young woman at a window”である。

She sits with

tears on

her cheek

her cheek on

her hand

the child

in her lap

his nose

pressed

to the glass

何の説明もなく、何の修飾もなく、一つの情景が映し出される。カメラの非情なレンズが捉えた、というよりも、レントゲン写真が映し出した、といった方が適切な情景である。ここに有るのは、一つの情景の骨組みだけなのだ。

ある特殊な事柄は、その背後に、その事柄にまつわり付く様々な特殊事情を持っていると言える。しかし、その特殊事情を一つ一つ剥ぎ取っていくと、最後には、その事柄の本質だけが残る。残ったこの本質は、その特殊な事柄だけが持つものではなくて、実は、他の事柄もまた持っている本質である場合が多い。

この詩の場合も、感情や情緒、修飾や形容、説明や論理といったすべての夾雑物を取り去って呈示されたこの情景には、本質だけが残っていて、この本質が、普遍的なものになっている。読者は、この詩から、諸々の人生の悲哀を見るわけである。

Ⅲ

ウィリアムズは、事物そのものを描くだけでなく、身の回りに生じる日常的な出来事をも描いた。その一つが“The term”である。

A rumpled sheet
of brown paper
about the length

and apparent bulk
of a man
rolling with the

wind slowly over
and over in
the street as

a car drove down

upon it and

crushed it to

the ground. Unlike

a man it rose

again rolling

with the wind over

and over to be as

it was before.

一枚の紙が、風に吹かれて街路で舞っている。自動車が走って来てこの紙を轢くが、その紙はまた風で舞い上って、くるくる動いている。日常目にする何の変てつもない出来事である。この様に些細な事も、ウィリアムズは、たちどころに詩にしてしまう。この詩も、一見、日常的な一つの出来事を、有るがままに記述しただけに思えるが、その奥に、何か不気味なものを暗示している。これをもたらすのは、この紙の大きさが“of a man... (人間ほどのもの...)”であって、この紙が、車に轢かれた後、“Unlike/a man (人間とは違って)”また立ち上って風に吹かれて舞う、という描写である。ウィリアムズは、この一枚の紙に人間を表象しているわけではない。彼にとっては、これは一枚の紙という事物以外の何物でもない。そして、彼の眼は、その紙の大きさが人間くらいで、車に轢かれた後の動きが、人間とは異っている、と一瞬のうちに判断するのだ。ウィリアムズにとって、この場合のこの紙が持っている属性を表わすには、この表現しかない。こうして呈示された一枚の紙の動きに、人間の日常性の背後にひそむグロテスクな恐怖が暗示されているのである。

“Complete Destruction” もまた、日常的な事柄を通して、普遍的に存在する恐怖を示すものである。

It was an icy day,
We burried the cat,
then took her box
and set match to it

in the back yard.
Those fleas that escaped
earth and fire
died by the cold.

冷たい日。死んだネコを埋葬し、ネコの箱を燃やす。ネコにたかっていたノミのうち、ネコと共に土にも埋められず、箱と一緒に燃やされもしないで、生き残ったかに見えたものも、寒さで死んでしまった、という一つの出来事である。ただこれだけの、極くつまらない事柄が、例によって、没感情的で即物的な筆致で、語られる。ネコの死という現実、そのネコの死から逃れることは出来たが、自らの死は避けられないノミ。ウィリアムズは、ある一つの小さな死を媒介として、さらに一層小さい死を、冷徹に直視する。読者は、そこに、生命あるものすべてにとって死が不可避だという事実を、戦慄をもって、悟るのである。

“At the Ball Game” は、球技場の観衆の様子を描写することによって、群衆というものが具有している不気味な恐ろしさを、示す詩である。

The crowd at the ball game
is moved uniformly
by a spirit of uselessness
which delights them—

all the exciting detail
of the chase

and the escape, the error
the flash of genius—

all to no end save beauty
the eternal—

So in detail they, the crowd,
are beautiful

for this
to be warned against

saluted and defied—
It is alive, venomous

it smiles grimly
its words cut—

The flashy female with her
mother, gets it—

The Jew gets it straight—it
is deadly, terrifying—

It is the Inquisition, the

Revolution

It is beauty itself

that lives

day by day in them

idly—

This is

the power of their faces

It is summer, it is the solstice

the crowd is

cheering, the crowd is laughing

in detail

permanently, seriously

without thought

第一連は、この詩の内容の基調を成している。1行目の“The crowd at the ball game（球技を見ている群衆は）”で、この詩の主題が呈示され、2行目“is moved uniformly（画一的に動かされる）”で、観衆の属性が端的に述べられる。余分な修飾の一切無い即物的な表現によって、群衆が持っている主体性のない不気味さが、描写されている。

ウィリアムズの詩を形の上で見ると、これまでに採り上げたものからも判るとうり、一つの行を構成する語数も、これらの語の音節の数も、極度に少ないのが特徴となっている。これは、眼に映った事物を一瞬のうちに捉え、その事

物の本質を、夾雑物を排して即物的に捉える、ウィリアムズの物の見方によるものである。そして、この各行が、ある一つのまとまった単位を形成する場合が多い。一行目で主題を呈示し、二行目でその主題の属性を述べるこの二行も、その好例と言える。

第二連は、第一連を受けて、“by a spirit of uselessness/wich delights them—（彼等を喜ばせる／無益な気分によって—）”と、群衆の感情を揺り動かす原因を示すのであるが、これが無益な喜びであるところに、群衆の無気味さが一層強調される。

第三連から第五連までは、群衆を動かしているものが具体的に列挙される。冒頭からここまで、ウィリアムズの眼は、群衆からその動きへ、さらに、その動きの原因の詳細へと、対象の内部へ突き進んで行く。

第六連では、視点が再び群衆に戻り、群衆の属性として美を認める。この美は一種の力強さとも解釈出来る。以下の連で、その群衆の強さの原因が述べられ、第八連の二行目“*It is alive, venomous*（それは生き活きとし、悪意に満ち）”さらに次の連“*it smiles grimly/its words cut—*（それは気味悪く笑い／その言葉は切りつける—）”と、群衆あるいは群衆の持つ不気味さや残酷さが、明確な形をとる。

第十連、第十一連では、群衆の中から“*The flashy female*（けばけばしい女）”と“*The jew*（ユダヤ人）”とを、群衆を構成する一人として具体的に取り出して、群衆の一人一人もまた、個人としては、群衆が全体として持っている残酷さ、恐ろしさの餌食になる様子が描かれる。

この恐怖のイメージは、想像力の飛躍によって、次の連、“*It is the Inquisition, the/Revolution*（それは宗教裁判だ／革命だ）”で、宗教裁判と革命に重ね合わされる。

そして、以下の三つの連で、群衆の属性の強さと無益さが述べられ、最後の三つの連に於ける群衆の描写によって、この詩は終る。最後の三連は、最初の数連と同じく、冷徹な眼による群衆の描写であり、特に、最後の連、“*permanently, seriously/without thought*（永久に、真剣に／思考もなく）”では、群

衆の不気味な無思考性は永久に変わらない、しということが、一行目の同じリズムを持った多音節の二語の反復によって効果的に、示されている。

この“*At the Ball Game*”は、これまで採り上げてきた詩といくつかの点で趣を異にはするが、やはり、ある球技を見ている観衆の様子を鋭く見つめることによって、群衆というものが普遍的に具有している、強靱さ、残酷さ、無気味さ、恐ろしさ、俗悪さ、そして思考の無さを冷徹に呈示し、日常生活にひそむ恐怖といったものを描いているのである。

ウィリアムズは、日常の身の回りにある平凡な事物を、強烈な集中力と厳しい選択力と的確な表現力によって、即物的に呈示した。ウィリアムズの眼に映った事物は、これによって夾雑物を剥ぎ取られて、収斂し、その事物の本質に達する。そして、この本質が、普遍性を有することとなり、その事物だけに止まらずに、その事物を包含する世界に向って、発散して行くのである。

ウィリアムズの詩の世界を構築する要素には、様々なものがあるが、事物の即物的な呈示によるリアリティーの把握は、その原点になっている。

注

- (1) ウィリアムズの詩の手法に関しては、その一端を拙稿「William Carlos Williams について」(『東海大学紀要・文学部』, 第25輯, 1976) に於いて考察した。
- (2) 本稿のテキストとしては, Williams, Carlos William. *The Collected Earlier Poems*. New York: New Directions Publishing Co., 1966. を使用した。
- (3) Alan Ostrom, *The Poetic World of William Carlos Williams* (Southern Illinois University Press, 1968), p. 21.
- (4) Kenneth Burke, "William Carlos Williams: Two Judgements," from *William Carlos Williams: A Collection of Critical Essays*, (ed.) J. Hills Miller (Englewood Cliffs, N. J.; Prentice-Hall, Inc, 1966), pp. 47~48.
- (5) "Paterson • The Flower," l. 5.
- (6) Rod Townley, *The Early Poetry of William Carlos Williams* (London: Cornell University Press Ltd, 1975), p. 118.
- (7) Ostrom, *op. cit.*, p. 46.